

## 「余暇の義務化」への視点

### The Perspective of “the Obligation on Leisure”

中溝 一仁

NAKAMIZO, Kazuhito

E-mail: nakamizo@rikkyo.ac.jp

著者は、立教大学非常勤講師である。

The author is a part-time Lecturer at Rikkyo University.

#### 1 はじめに

これまで行ってきた余暇の研究において、意図せずその存在に気づいたことがある。それが「余暇の逆機能」である。本来、楽しむために行っているはずの余暇の活動が期待通りの結果をもたらさず、反対にストレスになるようなケースである。この原因は大きく分けて2つある。ひとつが「人間関係」であり、もうひとつが「余暇の義務化」である。いずれも集団で行われる活動において発生しやすい。前者の「人間関係」は、「意地悪な人がいる」「陰口を言われた」「〇〇さんとつきあうと面倒」など様々な理由があるが、活動の満足度を下げることは想像に難くない。後者の「余暇の義務化」という現象は非常に興味深い。義務から解放された「まったく随意に行う活動の総体」(Dumazedier 1962=1972: 19) が余暇の定義であるならば、「義務化した余暇」はこの意味において余暇とは言えない。しかし、実際に余暇活動の場面でこの「余暇の義務化」が発生しているのである。

#### 2 余暇が義務化する原因

星新一の近未来小説『未来いそっぷ』の中に「余暇の芸術」というショート・ショートがある。紙幅が限られているので簡潔に紹介すると、技術革新が進み人々の労働時間が短縮される。多くの余暇時間を手に入れた人々は各々創造的な余暇活動にいそしむ。その結果、それを発表したい欲求に駆られ、お互いに作品

を見に来るよう誘い合うようになる。主人公も自分の作品を見て(読んで)もらうために、数々の行きたくない他人の作品の発表会に足を運び鑑賞し、賞賛する。最後にある人がつぶやく。「こんなひどい時代になるとは、むかしの人は予想もしなかったことだろうな……」(星1982: 74)。

現代がこの話と異なる点は、技術が進歩しても労働時間が減らない状況である。つまり、現役就労世代にはこの話は当てはまらない。しかし、労働を持たない多くの健康な高齢者においては、上述の状況は十分起こり得る。まさに「余暇の義務化」である。町内会(自治会)やご近所づきあいの一環として行く日帰り旅行やリクリエーション活動、また会社や同窓の「先輩・後輩」の関係などでもこの義務化は発生する。「余暇の活動なのだから負担ならやめればよい」と思うかもしれないが、つきあい上、容易にはやめられない。義務としての労働がない高齢者にとって、断る理由として大きな説得力を持つ「仕事で忙しいから」という言い訳が通用しない以上、人間関係を悪化させてまであからさまに誘いを断ることはハードルが高い。これらは人間関係に起因する「余暇の義務化」である。この他にも、引きこもりがちな高齢者が家族からもっと積極的に外に出て人と交流するように言われ、半ば強制的に余暇活動に参加するケースなども昨年の調査から見て取れた。

#### 3 調査で見られた「余暇の義務化」について

メンバーの多い団体には多くの役職や中間管理職が存在する。それらの役職に就いたために、活動そのものよりも周辺の「仕事」に時間が掛かり、また責任が伴い活動を休めない状況になり義務化することがある。特に、望まずにその役職に就いた場合（クジで負けたリ、持ち回りだったりして）、団体を辞めることもできずにより大きなストレスになる。音楽関係の団体から複数の同様の回答が得られている。

代表者の熱意が空回りして義務化を招くこともある。練習への参加を強く促したり、活動上の様々な仕事をメンバーに依頼したりするようになり、それらがメンバーの精神的・物理的な負担となり、次第に楽しさが薄れ、気持ちも離れていき解散に至ったという団体の元メンバーの話を複数聞くことができた（合唱団、吹奏楽団、エアロビクス）。楽しいはずの趣味の活動が負担になり逆機能として働いたケースである。

一方で、調査の中では「余暇の義務化」を「意図的に回避する人」の話を聞くこともできた。「予定を詰めすぎて身体がしんどいことがある」と回答したほどの70歳（当時）の男性だが、「義務」となるような役職は一つも持っていない。いずれの活動についても役員やスタッフなどの役職には就かず、すべて「一参加者」という立場で参加しているのである。また、彼は「まずは一度参加してみて、人間関係が面倒になるところには次から行かないようにしている」という。さらに次回以降の誘いを断りやすくするため、ホームページやフェイスブックから情報を得て既存の関係の無い新しい活動に参加するようにしているという。はじめから用心深く活動に参加しているのである。

#### 4 まとめ

人々の生活の重心が「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」にシフトしてから約40年が経つ。「今」の生活を充実させるためにも、また、長い第二の人生を楽しむためにも多くの人にとっては何らかの余暇活動を行うことは重要である。我が国における余暇の問題は、ライフサイクルにおける余暇時間の「偏在」という側面もある。現在の日本では長生きをしない限り充実した余暇活動ができない可能性が高いのである。また、

「壮年時代には余暇に乏しかった日本の勤労者も、ひとたびリタイアすれば『余暇の大海』に投げ出される。余暇への構えも余暇能力の開発も不十分な定年族は、与えられた余暇という資源の活用策に、生きる課題として取り組まざるを得ない」（藺田2012: 231）。現役就労時代から引退後を見据えた持続可能な余暇活動が必要なのである。

しかし、一方で闇雲に余暇の活動を推進すればいいというものではない。余暇活動の数を増やし長く時間を使うという「量」への焦点だけではなく、余暇活動が本当の意味で生活の満足度を高める順機能を果たすべく「質」についても十分に顧慮して研究を進めていくことが不可欠であると考えられる。『レジャー白書』のような量的調査研究はもちろん重要だが、同時にそれだけでは表に出ない可能性のある「生活の満足度」に関連した余暇の「質」についての眼差しを持つことも今後より大切になってくるであろう。

#### ■主要参考文献

- Dumazedier, Joffre, 1962, *Vers une civilisation du loisir?*, Éditions du Seuil. (=1972, 中嶋巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社.)
- Merton, K. Robert, 1957, *Contributions to the Theory of Reference Group Behavior, Social Theory and Social Structure*, revised ed., Glencoe, Illinois: The Free Press. (=1991, 森東吾ほか『社会理論と機能分析』青木書店.)
- 藺田碩哉, 2012, 『余暇という希望』叢文社.
- 中溝一仁, 2005, 「高齢社会における余暇問題」, 『立教大学大学院社会学研究科論集第6号』, 立教大学社会学部.
- 中溝一仁, 2017, 「高齢社会における日常的余暇活動への参加と生活の満足度について」, 『応用社会学研究No. 59』立教大学社会学部.
- 星新一, 1982, 『未来いそっぶ』新潮文庫.